

彙報

●史學研究會大會

十一月十八十九日の兩日、本會昭和八年度大會を行ふ。第一日は例年の通り午後一時より京都市帝國大學藥友會館大講演室に開催、左の三氏の講演あり來會者約二百五十名、其の間評議員の改選をなし、石橋五郎、羽田亨、原隨岡、濱田耕作、西田直二郎、時野谷常三郎、那波利貞、中村直勝、矢野仁一、小牧實繁の十氏が當選した。

日本中世の農民の身分

牧 健二氏

我が國中世に於ける農民の身分を考察する多くの人々が、西洋封建社會に於いて見らるゝ搾取、被搾取の關係を以て直ちに我國のそれに適用することの誤りを防ぐため、武家政治の創始により出現せる守護地頭の地位が、領主と農民の間に介在してゐる特殊性を觀察して、その存在が或る點農民を解放せると同時に他面束縛するに至れる事情を、封建君主と領主及び農民の關係に就きて我國封建制度の有せる特殊なる形式よりして論じ、農民の身分を正しく理解するための論者態度を明らかにし、終りにその具體的事例について若干述べるところがあつた。

官營となりたる益州交子制度

加藤 繁氏

宋初益州に於て鐵錢が用ゐられて重くて携帶に不便なりし爲、富豪十六戸が共同して交子を發行した。交子の表には屋木人物などの模様を印刷し、現錢を持ち來りて交子を乞ふ者あれば其錢數を發行者の押字を書き込みて與へた。之は何時にても兌換するが其際手数料として毎貫三十文を徴する。然るに交子鋪戸は預りたる見錢を他に流用して利殖を試み、遂には見錢の兌換に應ぜられなくなつたので、天聖元年に至り政府は民間の交子發行を禁じ、益州に交子務を開いて官營に移した。發行の方法は凡て民營時代の舊に從つたのであるが、預りたる見錢を以て他に流用して利殖を得んとするは矢張免れ難き誘惑である。そこで兌換準備金を常に蓄へ置く制度が定められてあつた。それにも拘らず、政府財政難の爲、西夏の侵入に備へて重兵を宿せる陝西地方に益州の交子を運びて使用し、之には別に兌換準備金を設けざりし等の爲、次第に交子制度の紊亂を來すに至つた。

ルネサンス人の中世觀

大類 仲氏

先づ本講演は Giorgio Vasari の「名匠列傳」、特にその列傳序文を中心し時代との關聯に於て考察するものなりとして、列傳序文の意義、内容について概説された後、グアザリの中世非難、古代崇拜及び當代讚美について、彼の中世非難はその *Counter* (混亂せる) なる状態に向けられた事、それに對し古代

崇拜、當代讚美はそれ等が Orline (統制秩序) を持つにあつた事及びかくの如き中世ゴテイク批評は既に Ghiberti, Alberti, Filarete, Raffaello 等諸家の説に見られる事等を述べられ、次いでアルベルテイとヴァザリについて同じく中世非難をなすとは云へ、前者が古代的なるものと中世的なるものを調和して新しきものを創らんとするに對し、後者は中世とルネサンスを全く對立せるものと考へる如き差違ありとし、かゝる差違は結局時代の大きな轉換によるものとせられた。轉じてヴァザリの史觀について彼が發展過程よりも完成せる姿に興味を持つた事、彼の態度は樂觀的であるが悲觀的な點も見出せる事等を述べられた後、最後に以上の如きヴァザリの中世ゴテイク非難には、當時外國兵の侵入によつてイタリヤ人の間に高まつた排外的傾向、特に L'orgoglio (獨逸人) に對する嫌忌の情が大なる影響を興へてゐるとして、伊太利的精神及び郷土的感情についてダント、ペトラルカ、マキヤベリ等を引用しつゝ述べ、結局マキヤベリが *virtù* によつた所のものをヴァザリは *ingegno* (天賦の才) によらんとしたのである等々について述べられた。

講演後同所に於て晚餐會及び懇話會を開き出席者約五十名、午後十時頃散會。

第二日は洛東泉涌寺並に東福寺の見學を行つた。午前九時一同泉涌寺客殿に參集、まづ陵墓監の東道を以て孝明天皇後月輪東山陵を拜し、順次英照皇太后後月輪東山東北陵、光格仁孝兩帝の後月輪陵並に四條天皇以下十二帝の月輪十二陵の參拜を終

へ、再び客殿に戻つて小憩後高橋執事長の案内にて靈明殿に參拜、尋で書院その他殿舎の中を一巡し、本會の爲に特に陳列された什寶の類を拜觀した。午後東福寺では普門院に於て國寶の繪畫、古文書並に圖書の類を觀、後役僧の先導にて新建の本堂を始め國寶の三門、浴室、東司並選佛場等普く山門を一巡し午後三時散會した。因に、この日特に陳列された什寶は左記の通である。

○泉涌寺

一、歴代御尊影

四條天皇 後水尾天皇 後陽成天皇

中御門天皇 靈元天皇 光格天皇

仁孝天皇 孝明天皇

一、御葬儀諸式並御行列之圖 壹卷

一、翁前堂及山頭式場之圖 壹卷

一、御中陰泉山御道場之圖 壹卷

一、同 殿舟院御道場之圖 壹卷

一、洞中光明供御儀法之圖 壹卷

一、古伽藍圖 壹幅

一、同 別所如閑筆 壹幅

一、中御門天皇宸翰 正法國師加號勅書 壹幅

一、子ノ白遊圖屏風 浮田一蕙筆 六曲一雙

一、朝鮮禮聘使圖屏風 六曲一雙

○東福寺

- 一、無準畫像 自贊絹本着色 壹幅
- 一、明兆自畫像 紙本淡彩 壹幅
- 一、大鑑畫像 明兆筆四十祖像ノ中 紙本着色 壹幅
- 一、應庵像 同 壹幅
- 一、五百羅漢圖 明兆筆四十五幅ノ中 絹本着色 貳幅
- 一、同 下繪 貳幅
- 一、大宋諸山之圖 紙本墨書 壹卷
- 一、惣處分狀 壹卷
- 一、東福寺文書 十冊
- 一、元亨釋書 古寫本 一冊
- 一、中庸說 宋版 一冊
- 一、太平御覽 宋版百三冊ノ中 三冊
- 一、閑悟語錄 一冊
- 一、宋版大藏經 一冊
- 一、臺宗十類因革論 一冊
- 一、南山律師撰彙錄 一冊

以上

最後に右見學の爲に特別の便宜を興へられた兩寺に對し深厚の謝意を表す。

西洋史讀書會

例會 昭和八年九月二十八日午後六時半より樂友會館第一號室に於て開催、左の研究發表及び讀書紹介ありて十時半散會、

出席者二十二名。

一、外相パーマストーン時代に於ける英佛外交關係について

二回生 薄井 寛介君

一、K. Brundtj. Die Renaissance in Florenz und Rom.

二回生 武藤 醇吉君

大會 西洋史讀書會は既に明治四十三年頃より開かれその後屢々開催されてゐたとの事であるが、一時中絶してゐたのを大正八年再興されたのである。而して本年はその再興以來十五年に當り、偶々大會開催の機運も熟したので、十月七日樂友會館に於て再興第十五周年記念大會を開催した。當日は午後一時より公開講演會を開催し左記の講演があつた。雨天にも拘らず會するもの五十名に及んだ。講演會終了後會員一同晚餐を共にし、引續き懇話會に移り、時野谷先生司會の下に、濱田先生を始め市村興市、中原興茂九郎、竹村越三、佐々木忍、巖根智照、井上智勇の諸氏より讀書會に關する回顧談及び將來の希望、提案等あり、懇話の後十時閉會した。講演會の演題、講演者左の如し。

講演會

一、開會の辭 文學博士 原 隨園先生

一、幕末に於ける日本の國際的地位に就いて

文學士 杉本 克巳氏

一、十三世紀後半期に於けるフロレンスの社會構成

文學士 顯見 高年氏

一、ナポレオン一世に就いて 文學士 江坂長四郎氏

一、テルポイ託宣考 文學士 吉原 好人氏

一、マケドニヤ社會の一發展期 文學士 村田數之亮氏

一、Bernhard Haldermann; Albert Pallin (Berlin 1922)に就いて 文學士 竹村 越三氏

一、古代埃及に於ける神々の行方 文學士 岡島誠太郎氏

一、アジア的生產様式の問題に就いて 文學士中原興茂九郎氏

一、近世初期の科學 醫學士 菅原 靈氏

一、閉會の辭 文學博士 時野谷常三郎先生

例會 十一月十七日午後六時半より樂友會館第一號室に於て開催、當日は史學研究會大會の前夜にて御講演のため久し振りに入浴せられた東北帝大の大類伸先生を始め、同行の同學助手照井豊氏及び同大學院學生金倉英一氏を迎へて交歓する意味を兼ねてゐた。先づ

一、Philosophesの一展開に就いて 二回生 前川貞次郎君

一、名譽革命に就いて 二回生 金子 幸助君

の研究發表あり、次いで金倉英一氏は Machiavelli の Mandragola に就いて話され、照井豊氏は古代羅馬没落に關する二論文、Sickler: Particularism in the Roman Empire during the Military Anarchy. (Amer. Journ. of Philology, LI, 1930.); Y. G. Sirkhovich: Rome's Fall Reconsidered. (Political Sci.

ence Quarterly XXXI, 1916). を紹介された。最後に大類博士の談話があり、交歓の實を果けて十時過ぎ散會、出席者二十九名。

●地理學談話會大會

地理學教室關係者を以てなる地理學談話會は從來専ら學内に於て會員の研究發表を行つて相互の向上と親睦を計つて來たが今回始めて街頭に進出し、去る十二月二日午後二時より大毎會館に於て公開講演を行つた處、聽衆約二百名に達し盛會であつた。當日のプログラム左記の如し。

一、閉會の辭 本學教授 石橋 五郎

一、アフリカの一瞥 本學助教授 小牧 實繁

一、我が南洋諸島に就いて 高津中學教諭 島 之夫

一、滿洲國と植民地理 彦根高等商業教授 田中 秀作

一、ハンブルヒ港ライオン河の春其他(二卷(映畫)) 理學士 ヨルン・レノ

先づ石橋五郎博士は地理學の意義を述べて地理教室が文學部にある所以を明らかにして閉會の辭とされ次で小牧助教授はアフリカ特にアビシニヤに就き、又島之夫學士は我が南洋諸島に就いて極めて興味深き又有益なる講演をなされ、田中教授は植民地理の新體系樹立に就いて滿洲國を例として鮮明なる各種分布圖を利用しながら學問と實益とを兼ねたる講演をなされた。最後にヨルン・レノ學士は流暢な日本語を以て、獨逸鐵道省製作に係る前記二卷の映畫の説明に當られた。終つて四條矢尾政に

於て懇親晚餐會を開く。岩井大毎京都支局長、中村新太郎教授等の御來會あり、歡を盡した。尙席上大垣商業秋山教諭の輪中に關する詳細なる研究發表があつた。(米倉)

●京都帝國大學國史學會

京都帝國大學文學部國史研究室では最近在籍の大学院學生が著しく増加し従前の讀史會のみを以てしてはその研究成果を發表するの機に不足するに鑑み、此程新に國史學會の名を以て隨時公開講演を開き、新進の研究家達を世に紹介することとなり、昨秋九月三十日その第一回の講演を樂友會館講堂に於て開催した。その講演内容はその後の修正を加へて順次本誌上に發表せらるゝ筈であるから、その題目のみを左に記すにとゞめる。

晝の部

- 近世史と國學の問題 文學士 前田 一良
 - 戰國諸侯の法制 文學士 田中 遼男
 - 覺信尼に就て 文學士 赤松 俊秀
 - 江戸時代の河川運送 文學士 原 興作
 - 古代生活に於ける瓶尊 文學士 池田 源太
 - 並川誠所と並川天民 文學博士 西田直二郎
- 夜の部
- 近世初期に於ける町人階級に就て 文學士 小川 勝
 - 奈良朝廷の護民政策 文學士 福尾猛市郎
 - 英人の眼に映じたる幕末の日本 文學士 吉田 三郎

國學者谷川士清の神道觀とその學風 加藤 竹男
海部氏系圖に就て 文學博士 宮地 直一
尙會場の一部には講演に關聯して並川誠所並に天民の遺著遺墨、本願寺文書(寫眞)、海部氏系圖(寫眞)、その他が陳列された。

●讀史會

例會 昨年十月五日(木)午後六時三十分より京大樂友會館階上第一號室に於て開會、西田教授、牧教授以下會するもの十七名、左の研究發表あり、午後十時過ぎ閉會。

○題目

- 一、鎌倉彫刻と南都兩大寺の復興 文學士 向井 芳彦君
 - 一、大吉寺址に就いて 文學士 柏倉 亮吉君
 - 例會 十一月二十八日(土)午後六時半より樂友會館第一號室に於て開會、西田教授、中村助教授以下會するもの二十三名、午後十時半閉會。
 - 講題
 - 一、攝津甲山神呪寺の研究 文學士 武藤 誠君
 - 一、商工民の組織としての座 文學士 清水 三男君
- 民俗學會
例會 五月二十三日、百萬遍方丈にて夕七時より開催、西田

教授御出席、左の講演あり。

一、南洋歸朝談

西田 教授

南洋シアバ地方に於ける宗教、土俗に關する種々御見學の報告あり、旅行談にも花が咲いて興味深かつた。

例會 六月九日、學生集會所に於て夕七時より開催、小牧助教以下十四名參會、左の講演あり。

一、瓶尊の呪

池田 源太氏

一、唾液に關する信仰

大栗 傳三氏

例會 六月二十七日、學生集會所に於て夕七時半より開催、喜田講師以下二十二名參會、左の講演あり、十時閉會。

一、山民の話

喜田 講師

例會 十月七日、學生集會所に於て夕七時より開催、會する者八名、左の講演あり。

一、出雲國讓傳説

勝谷 透氏

一、東京城五鳳樓

水野 清一氏

例會 十一月四日、樂友會館に於て夕七時より開催、三十名參會、左の講演あり、十一時閉會。

一、性的神に就て

田中 綠紅氏

一、日吉神社祭禮田樂に就て

柴田 實氏

なほ田中氏は性的神に關する數百葉の寫眞を展觀せられ、柴田氏は、先日西田教授と共に撮影せられた十六ミリの映寫されたが機械の故障の爲め中途で果さなかつたのは遺憾であつた。

●支那學會遊支報告會

十月七日、午後六時半より、北白川東方文化學院京都研究所にて開催、遊支學生の報告があり、引率された宮崎市定氏は泰山旅行の話をされた。

●支那學會那波助教歡迎會

十月十三日、午後六時より、出町スターに於いて、西歐留學より新しく歸朝された助教那波利貞氏の歡迎晩餐會を開く。食後、那波氏は滯佛中に調査された敦煌文書に就いて種々談ぜられた。

●支那學會樂劇レコード演奏會

十月十四日、午後三時より、北白川東方文化學院に於いて、今度、文學部に購入された支那樂劇レコードの演奏會を開く。まづ、倉石武四郎氏通譯にて、傅芸子氏の支那樂劇に關する沿革解説があつて、引續き曲目の演奏に移る。一々傅氏の懇切なる解説があつて、夕食後、九時過ぎに及んだ。

●支那學會連續講演會

十一月九日、十六日、三十日及び十二月七日の數回に互つて、午後三時十五分より、北白川東方文化學院に於いて能田忠亮氏の支那學研究に必要な基礎天文学の連續講演があつた。第一回は支那天文学研究の現狀を述べて、現今、問題になつてゐる

論争の眼目に及び、第二回では天體運行に關する基礎智識、第三回では星辰の萬國協定の、及び支那の呼稱、第四回では運行の諸現象に就いて講ぜられた。

●東方文化學院京都研究所講演會

十月二十八日、午後三時より、北白川同研究所に於いて。
五行の排列と五帝德に就いて
狩野 直喜氏

●東方文化學院京都研究所記念講演會

十一月十一日、午後三時より、北白川同研究所に於いて。
兩漢の廟制
松浦嘉三郎氏
松本文三郎氏
則天武后の白氏馬坂の大像に就いて

●大和島の庄「石舞臺」の發掘

京都大學考古學教室では今回、日本學術振興會の補助を得て、大和高市郡岡村島の島の「石舞臺」の發掘調査を行った。「石舞臺」とは俗間の稱呼で、この古墳が封土を失ひ、石室部の巨石を畑の中に露出してゐるから興つたのであらう。一説には蘇我馬子の墓だと云はれてゐる。十月七日に工を起し、濱田教授、梅原助教の指導の下に、末永雅雄氏主として現場を監督し、彌津正志、齋藤忠の兩氏がこれを佐けた。十二月五日に至つて發掘は略々完了した。その結果、長さ三十八尺に及ぶ羨道、高さ十五尺、長さ二十八尺、幅十二尺に互る玄室が掘出された。

石室は封土の礫石と粘土で埋つてゐたが、その底部は鋪石にて掩はれ、一片の凝灰岩加工品（石棺斷片？）と一二の陶壺が發見された。この陶壺は奈良朝、平安朝頃の諸遺蹟からよく見出される類で、この横口式石室が、比較的早い時期に於いて既に口を開いてゐたことを物語る貴重な資料である。なほ古墳は何れ史蹟に指定されるであらうが、まづ奈良縣の手で適當な保存方法を講じ、觀者の便を計る筈になつてゐる。

●東洋史談話會記事

第三十三回例會 九月二十七日（水）午後六時半より

於 樂友會館第一號室 出席者二十三名
一、東京城發掘旅行談 外山 軍治氏
一、同 水野 清一氏

本年六月渤海國上京龍泉府遺址の發掘調査の一行に參加した兩氏の興味ある講演で外山氏は上京に到る迄の旅行談、水野氏は上京における發掘の次第を寫眞を示しつゝ、語る。

第三十四回例會 十月二日（木）午後六時半より

於 樂友會館第一號室 出席者二十四名
一 敦煌文書調査談 那波 助教
佛國留學の間巴里に於いて敦煌文書の調査に當りし一年八ヶ月の成果を發表さる。

第三十五回例會 十一月二日（木）午後六時半より

於 學生集會所南室 出席者三十名

一、元代諸外國人所見の杭州

三回生 佐藤 正義氏

一、曲阜泰山遊記

宮崎 講師

羽田教授始め多數の參會あり、講師として來任中の東大池内教授も出席された。談話會始つて以來の盛會。

第三十六回例會 十二月八日(金)午後六時より

於 樂友會館第一號室 出席者二十四名

一、天寶時代の社會と法制

三回生 田邊 晃氏

一、通志に現はれたる鄭樵の史觀

内藤 戊申氏

●國史科研究旅行報告

例年行事として昨秋も京都帝國大學史學科は國史二回生を中心、其研究の鋒先を關東並に東北地方に向け、興味深き見學旅行を行つた。一行三十名は西田・中村・藤三先生、柴田助手以下に引率せられ十月十四日より同二十一日迄八日間の短時日であつたけれども、資料豊富なる地方を選んでの計畫であつただけに、その得たる所は眞に洵り知るべからざるものがあつた。

〔若松〕

第一日(十月十四日)出發。

一行二十七名午後八時十分の汽車に乗り京都を出發。滿員が超滿員に成つて眠る處の騒ぎでない、立ち續けの状態に明日の疲勞が思ひやられる。

第二日(十月十五日)鎌倉及金澤文庫

睡眠不足のまゝに大船に着く。觸島、座田兩氏のお出迎へをうけ、兩氏の御案内によつて朝霧の罩めた湘南の地に第一歩を踏み老杉の聳ゆる中を仰ぎつ、圓覺寺の山門に入る。廣い庭を過ぎて舍利殿の前に立つ。舍利殿は當山諸建築物中唯一の鎌倉時代のもので禪宗建築として最古のものである。茅葺の屋根が甚だ厚くために重い觀を呈し木割が小さいのにも拘らず、却つて、均整がよく保たれてなり、花頭窓が線が非常に強く、左右に張つて素朴な形をとつてゐるのが見られる。須彌壇勾欄の寶珠が遊華になつてゐるのも注意されねばならないものである。大震災で顛倒したが近年立派に修築されたもので鎌倉時代の禪宗建築の様式を窺ふ事が出来る。之れより時宗御廟所に行く。時宗の政務の餘暇坐禪修養した土地とかで公薨去の後此の地に埋葬され、その上にこの廟は立てられたものといふ。其後、貞時、高時を合して葬り、其上に建てられた廡所である。法體の木像を祀つてゐる。忙しい旅として十分の觀察する暇なく直ちに建長寺へと急ぐ。鎌倉五山の第一、時頼の閉基にかゝれるものであるが現存の建築物は多く當時のものでない。寺務所に入り古記録、畫像等を見る。周の共王より初まつてゐる大過去帳(三冊内一冊は元祿十三年庚辰の奥書ある寫本)は日本の記事を上段に支那の記事を下段に書いた日支對照年表で非常に吾々の興味をそゝつた。日本の記事は栢王九年庚午の年に「神武天皇生ル」とあるのが最初で恵王十七年辛酉の年に「神武天皇即位」とあり、貴樂、法清、兄弟、藏知、師安、知像、金光、賢稱、

鏡常等の私年號が敏達天皇の頃までに盛んに見え、紀年問題に關して興味あるものを與へた。永徳元年辛酉の年に今上皇帝の踐祚が記されてあるが、それは後小松天皇の事であるから、この大過去帳が第一次的に完成された年代が判明する。一本の寫本の方は二冊を抜萃しつゝ、永徳より寶徳まで書き加へられたものである。掛圖は三幅で、辛未季春住持建長禪寺宋蘭溪道隆奉爲 朗然居士書于觀瀾閣と末尾に書かれてゐる大覺禪師自畫自讃のもの、同じく竜石如芝禪師題讃のある自畫像、共に個性の表出に努めた寫實的の筆跡が見られる。鎌倉時代の肖像畫に親しく接するを得たのは望外の喜びであつた。又雄勁なる禪師の筆蹟及再來庵修造勸進狀を見て寺務所を辭し、建長七年乙卯二月二十一日の銘ある鐘を撫しつゝ、昭堂に廻り、建長寺を後にす。程近き鶴岡八幡宮に着いて社寶陳列所を二巡して社務所に入り、足利尊氏、義滿、持氏の寄進狀集成帳一卷、鶴岡八幡宮社務記録二卷、同社務次第一卷、頼朝寄進狀（壽永二年二月二十七日の日附あり）等の古文書、古記録を研究す。それより寶物殿に入る。中央に金色燦たる觀世音菩薩（足利期）藥師如來（鎌倉期）の巨大なる偉容を拜し、周圍に無數に配列されてある藤原、鎌倉、足利期の繪畫彫刻を短い時間を惜しみつゝ、觀察す。海藏寺藏の嘉元四年の刻ある釋迦三尊來迎圖を彫れる板碑は吾々關西のものには珍しいものであつた。寶物殿を出でて暖い陽をうけつゝ、大藏幕府跡、法華堂跡を經、頼朝の墓に詣つて鎌倉宮に行く。護良親王御幽閉所を拜して寶物殿を見學す。大塔宮令

旨案、赤松圓心の證判ある註進狀案、護良親王御眞筆等を見て社務所で晝食す。食後自動車に分乗して色付ける稻と秋色がすかなあこがれの湘南の山々を車窓に眺めつゝ、搖られつゝ稱名寺に着いた。近來頼に學界の注目する所となつた金澤文庫に到つて、心の興奮を覺ゆる。陳列されし消息類、片假名にて書かれた珍しい和歌、寫經等の古文書古記録、愛染明王坐像等の彫刻を見る。未だ整理されてゐない無數の古文書の片鱗を窺ふ、何と云つても貞顯の書狀だけでも數百通あるといふのに、全く驚くの外はない。整理出版の早からん事を願ひつゝ、金澤文庫を辭し、東京に向ふ。（大貫）

第三日（十月十六日）東京。維新史料、圖書寮、史料編纂所。東京の空氣は感歴的である。先づ新に改築された文部省を訪れ、九時半より維新史料編纂に關する、大塚先生の詳細な御説明あり、後一同史料見學をなす。唯時間不足の爲、興味多き豊富な史料を前にして、十分吟味出来なかつたのは残念であつた。披見した重なる史料は左の通りである。

- 一 大村兵部大輔旅寓（致亂入候暴人吟味一卷。原本京都府所藏。
- 一 明治二年九月四日、大村益次郎京都木屋町旅館に於て、暴徒の襲撃を受けた時の史料。
- 一 俄兎士溷爾書翰。英文原本北海道廳所藏。
- 一 英國官吏來翰錄。
- 一 函館駐在外國領事公文。北海道廳所藏。
- 一 櫻田叢書、徳川圀順氏所藏。

彰考館藏櫻田事件關係者の書翰を集録せるものにして、志士計畫の發端を知る。

一 雜事見聞日記。子爵福葉正凱所藏。

山城國淀藩主稻葉長門守正邦、安政六年八月江戸滞在の中の見聞録にして、開港直後の横須賀貿易に關する話を多く記せり。

一 國事私記。子爵野宮定茂所藏。

議奏野宮定功の自筆記録にして、文久二年勅使大原重徳下向當時の朝幕關係を祀す。

一 公務日記。村垣龜通氏所藏。

幕府外國奉行に任じ令名ありし村垣淡路守龜正の日記にして幕末外交の事を知る。

一 公家次第。維新史料編纂事務局所藏。

安政五年六月に於ける公家名鑑なり。

一 歐行日誌。益頭尙考氏所藏。

文久二年遣外使節竹内野守一行中の幕府普請役益頭駿河守の日記。

一 安積良齋書翰。楊取男爵所藏。

嘉永六年十二月十六日小倉尙藏宛のものにして、良齋時に昌平齋儒官たり。長藩士遊學の狀態及び米艦浦賀入津後の事情を知る。

一 年録（内閣文庫所藏）

一 江戸幕府公式の日記にして續徳川實記臺本ともいふべし、内容間々同じ。

一 過蠻叢議 過蠻叢議拾遺 水戸彰考館

水戸家所藏の幕末海防關係の貴重な文獻。

一 富津陣屋繪圖 織本泰氏藏

富津陣屋は古くは白川藩が房總の警備に任じて屯營せしめとして外警逼迫に伴ひ忍、會以下の諸侯相次いで成る。今廳市となり往來の節を偲ぶに由なきも、本圖詳密にして模様を語る。

一 土佐漂流日記 尙侯爵家藏

嘉永四年正月三日土佐人中濱萬次郎米艦に乗じて琉球に上陸せる頭末を記せるものにて、琉球廳吏は在番鹿兒島藩吏と議して彼を長崎奉行に送致せり。

一 馬關砲撃事件始末（元治元年八月）

書類寫眞多數。

一 初め神武天皇御陵に勅使發遣。

一 定功郷記。

一 公式御用記（自元治二年正月至十二月）

一 禁内事件

一 佛國皇帝ナポレオン三世書翰草案の複寫。

一 琉球關係書類多數 尙侯爵家所藏

その他、寧府記事。蝦夷錦。軍務官公貨出納簿、明治二年神祇省記録。奈良奉行川路聖謨日記。池田慶徳日記。又、三條實美、九條道孝、大木喬任、前原一誠等多くの書翰あり。

食堂にて晝食し、しばらく屋上より大東京の空を眺望す。やがて一時頃、藤井大塚兩先生の厚きおもてなしを謝しつゝ、宮内省圖書寮に向ふ。先づ書庫を見學し其の藏書設備の完備せるに驚く。一階は主に洋本にして、美麗なる外國より皇室への献上本が我々の目をひく。和本は二階に藏せられ、貴重書庫に於ては總て函入で整然たるものあり、觸目したるもののみを記してみれば、萬葉集古義原本。三國志。二十一史。八川文藻。乃服依裳。水野古文書。首楞嚴經疏大書千文。五經集注。有虞陶唐。國癸殷湯等である。次に屋上庭園に於て特に陣列され、吾々の見學を許された文書は次の如きものであつた。

看聞日記。後光嚴天皇踐祚記。類聚符宣抄。天正三年太政官符。春記。水左記。中右記。小右記。建武三年以來文書。新田義貞足利義滿以下將軍宣下文書。

かくて一同は、今日最後の目的である史料編纂所を訪れる爲に東大に向ふ。先づ渡邊編纂官より史料編纂に關するお話しあり、後、中村・鷲尾以下編纂官諸先生の説明を聞きつゝ、史料を見學する。其の重なるものは

一本光國師日記。一塵芥記。一大乘院寺社雜事記。一大乘院日記目錄。一古文書時代鑑。一秀吉に對し諸大名が忠誠を誓へる起請文。一言繼卿記永祿十二年。一本光國師日記原本。一秀吉自筆書狀天正十二年九月六日、北政所女中「いわへ宛てしもの。一家康自筆年具皆濟狀。一尊氏自筆「八幡大菩薩花押忠舉」(摹本)一道元禪師筆跡(摹本)。一佐竹氏家老梅政景日記。

一頼山陽絕筆。一東海道繪卷寫本。一安南交易圖寫本。

見學を終る頃、既に四時を過ぎ、朝からの曇天は小雨となつてゐた。かくて一同小憩の後同所に於ける恒例の東西兩大學交歡會に臨む。東大よりは中村、山本、宮地、平泉、相田先生以下多數學生の出席あり、各々自己の抱負の一端をのべ、歡を盡す事二時間餘に及んだ。同學の先輩としてまた同僚としての東大國史料の諸兄に面接し得たのは、まづ旅行中に於ける第一の喜であつたと言へる。(内藤)

第四日(十月十七日)東京帝室博物館、足利學校、饒阿寺。

九時菊富士ホテルを後にして博物館に行く。途中寛永寺を僅かに外部より觀る。帝室博物館に於ては、丁度渤海國首都出土展覽會が催されてゐる最中で我々にとつて全く喜ばしい事であつた。西田先生も此の日から一行に加はれる。出土品中興味あるものは文字瓦、瓦當、埴佛、石獅頭、綠釉陶甌柱座、その他花文方甌等多く、それらの發掘品には發掘地點を示すために詳細なる寫眞も添へられ、古への渤海國への高句麗、唐文化の浸染が看取される。

博物館を出て東武鐵道にて一路足利に向ふ、午後二時足利着。饒阿寺を通りすこして、先づ足利文庫に赴く。入徳門を通りて左手にある文庫に行く。文庫内に陳列されてゐる書の主なもの、「史記抄」古寫本十二冊、瑞仙桃源の講抄なり。「綴資治通鑑綱目」十三冊、徳川家康より岸主三要に所賜也、明版、弘治(甲子)慎獨齋板本。「春秋左子傳」南宋本二十五冊、每冊「足利學

校公用」「上杉安房守藤原憲實寄進」と署し花押あり。「元板十八史略」二冊、上卷末に、大永丙小春日、藤原憲實寄附、

藤公前年乙酉三月薨逝依遺命今歲寄置、能化安藝州山縣郡吉川氏之族之好叟逃東井花押とあり、「洗心易」古寫、二冊、表紙の裏に永享九年の古曆有り此の古曆は明治四十三年を去る事四九

五年也、「十八史略」、朝鮮銅活字本十冊、永樂庚子冬十月朝鮮王命じて銅活字を作らしめ、又新に大字の銅活字を作り、此書を印行せしむ、宣徳九年の跋文あり、「周易註疏」宋板十二冊每

卷陸子適三山本窓傳標の墨跡あり上杉右京亮藤原憲忠寄進押とあり、「職原抄」正平二年十二月一日書寫之並寫點筆權左中辨兼

右少衛少將源顯流とあり、「文選」二十冊。卷六十の奥書に「永祿三庚申六月七日平氏政朝臣、能化大隅産九華叟周易傳授之徒百

人百日講度十有六度也。行年六十一書之。加朱墨點三要」と、

又卷二十七には「學校寄進、能化九華六十一歳時也。加朱墨點、三要」、又卷五十七には「學校寄進、永祿三年庚申六月七日、平氏

政朝臣、能化九華叟行年六十一歳義易之講百日而畢十又六度而欲赴舊里相州之」とあり。その他周禮、六韜三略、貞觀政要、

毛詩鄭氏箋等々あり。

それより聖廟に詣る。中門に學校と書かれた扁額がある。正面の龕に孔子の坐像、その左に子思、右に顔子、曾子の木像を置く、左の方の一間に小野篁の像がある。辭して鏡阿寺に行く。

境内の四方に園濠及び土壘を繞らされて中世の居館の構造を思はしめる。本堂は相憎く修理中の爲に見られず、城内の各建物

の配置や格好なども他寺に見られない特殊なもので、武家の邸宅の佛を其儘に傳へてゐる。

寺務所の二階に於て我々のために特別に寺寶を陳列して下さる、興味深い珍物多くむさぼる如く見る。

關東管領足利滿兼氏滿書狀、尊氏下知狀、鎌倉公方家御判物五通、鏡阿寺文書、第十五卷、貞代、尊氏御判物六通、新井白石幕府により表装せる鏡阿寺古文書、「宋版一切經」其一、文永三年熱田大宮司息額田寛典寄進のものなり。傳教大師御筆金紙

金泥の法華經金軸。足利尊氏公木像一體。尊氏陣中の幔幕、「關東三十三度巡禮結願」、その外大小十三種の巡禮札、鎌倉時代華籠、「劍」兩齋國神來の作、「武者行列繪卷」五姓田芳柳筆、等々あり。

時間切迫のため、名残りを惜しみながら薄暮漸くたれて、園寶鐘樓を見て停車場へ。こゝより日光へ。秋冷湧えて身にこたへる。七時四十分頃日光小西旅館別館に足を伸し明日の旅を思ふ。(入江)

第五日(十月十八日) 日光。

午前八時旅館出發、電車、ケーブル、バスにて中宮祠驛着九時四十分。中禪寺湖、華嚴瀧を簡單に廻り十一時半東照宮着。社務所にて晝食後禰宜渡邊氏の案内にて参拜す。目の當りに見る日光廟、それは人々の想像してゐた華麗さであるが、又その想像によく合致するので驚きが大きい。然し、古まびた建築に目なれた關西人には一種悪趣味に似た感情を起さず。國寶の石鳥

居及び國寶の敷石を過ぎる。三棟ある神庫が各々建築様式が異つてゐる。特異な形をした御手洗所(鍋島氏獻)に至ると日光の眞面目を躍動させてゐる様である。朝鮮鐘の鐘樓や和蘭國王獻上の燈籠等一寸異國的なものまで揃つてゐる。

權現造りの御本殿等餘りにも有名でありすぎるものが次ぎ／＼に現はれて来る。本殿は元祿の修繕とか。中央唐門の割合に小なるは將軍參拜の時のみ使用する爲で、今ではいさゝか狭あいの感がある。眠猫の下なくゞり山腹の奥宮を拜す。傍なる御寶藏には當社唯一の祕寶である位記宣命が尙藏されてあつて、東照社を宮に改める太政官符とか、或は宣命、太政大臣の宣旨等を見る。慶長八年二月十二日の内大臣源朝臣を征夷大將軍に任ずる勅宣は吾々の大なる興味を引いた。

内大臣源朝臣

左中辨藤原朝臣光廣傳

宣權大納言藤原朝臣兼勝宣奉

勅件人宣爲征夷大將軍者

慶長八年二月十二日

中務大輔兼右大史博士小槻宿禰孝亮奉

東照宮の横の二荒神社に參拜する。所謂化燈籠は本殿の左後に在る。鹿沼權三郎教阿の獻上のもの。次いで輪王寺に參拜。頼朝再建と傳へられてゐる。この内常行堂と法華堂は輪王寺以前の建築様式を残してゐるとの事。三代將軍の廟所である。御手洗所、鼓樓、東照宮同様特異な様式である。慈眼堂、即ち天

海慈眼大師廟である。前に天海の藏書を入れた天海藏がある。この邊りば日光でも裏側に當り訪れる人もなく靜寂な山中の氣がこもつてゐる。天海藏が見たいのであつたけれども、心を残して去らねばならなかつた。輪王寺歴代の御墓所、北白川宮銅像模形並に御廟所護王殿等を拜し寶物館に至る。主として家康時代の衣服調度類が展觀されてゐた。

二時すぎ東照宮を退出、三時六分日光驛出發にて仙台に向ふ。東北本線に宇都宮で乗換へ、九時四十四分仙台に着く。喜田先生の御出迎を受け仙台の町を先生引率の下に旅館に至る。

第六日(十月十九日) 仙台、多賀城址、鹽釜。

午前八時半境屋旅館發。自動車にて十分、大崎八幡着。本日は東北帝大の大島氏の東道を賜はることとなる。

大崎八幡。祭神は應神、仲哀兩帝、神功皇后の三神、社殿は伊達政宗慶長九年造營を初め、十二年御神體移鎮、十四年に竣工せり。大工中村日向守家次初め彫刻師、繪師共に京都より迎へしものなり。その構造は豊國神社に模し、權現造で桃山式建築なり。拜殿は七間三面、本殿は五間三面、その間を石の間で結ぶ。本殿拜殿共に入母屋造柿葺で、拜殿は千鳥破風軒唐破風を用ひ、本殿には左右後に廊下を附す。複雑なるプランを有し變化に富み且つ輕快華麗のうちに豪壯の氣を含み、當時の特色を遺憾なく發揮せり。用材は全部檜にして、裝飾は内外ともに漆塗とし、それに彩色を施し、珍らしき模様の金具を附し、樹組の間や葺殿の内部の彫刻は大閤桐を中心に花鳥を出し、折上

格天井や龜腹を用ひて見飽きぬ思ひあり。日光が裝飾過多に陥れるに比し當社のそれは餘程落ち着きを見せてゐるはその宜しきを得たる故か。本社には毎正月、松を焼きての裸祭の奇習ありと。九時半辭去。十分に瑞鳳寺に到着。

瑞鳳殿。伊達政宗の廟所にて、政宗薨去の翌年建造せられたりといふ。社屋西面す。涅槃門を入つて石段を上つた所に拜殿あり。その後には三間三面の寶形造の本殿あり。拜殿と本殿は廊下によりて連絡さる。拜殿の正面の大斗の下に十字架を象る模様あり。その他ダイヤ、クラブ、ハート形の模様あるはローマ交通の影響ならん。本殿には政宗の像あり、中に遺骸を収む。柱は下に金を塗り、その上に黒漆を塗る。本殿の天人の彫刻、金唐門欄唐の二十四孝と龍虎憤鬪浮彫等は精巧なり。楯子格子や玉垣の屋根、柱、社前の石燈籠等に見らるゝ不揃を指して、大膽にして無邪氣、不調和の調和と云ひ、禪味横溢と説く解説者の雄辯は一行を煙にまけり。佐々木文山の篆額瑞鳳殿を後にして記念撮影。愉快な印象を残して辭去。東北帝大へ。

東北帝大。喜田先生に案内されて陳列室に入る。東北地方の出土品を多数藏せり。即ち、日高原別出土の石器時代と思しき劍、日本風のもの、その地獨特のものを含む函館附近の出土土、陸奥西津輕郡館岡村龜岡出土のアイマの使用品。

同中津輕郡佐野村出土の鳥形土器、及び口附き裝飾を有する土器、津輕各地出土の石棒、陸奥各地出土の石匙、青森縣下北郡大甕大間出土の環石から北海道式の壺、朝鮮會寧附近出土の

石斧石鏃、扱ては女陰の變化物と覺しき石製品あり。アイマの土俗品として、全部皮製の鎧、シヤマンの大鼓、魚皮製短甲等々一枚學し難し。次いで古文書見學。足利尊氏御教書(元弘三年五月三十日河次軍勢中宛)、北高顯家袖判の陸奥御家人會津野尻助房眞勝の着到狀、永仁三年二月二十八日の關東執權御教書、淺野長吉の折紙(天長十九年卯月二十三日)、伊達政宗の自筆の書(九月九日)、最上義光御書、以下海運資料を見て十一時半から東北帝大法文學部長武内博士を初め喜田、大類、岡崎、古田、曾我部等の諸先生と共に書齋の饗應にあづかる。折柄雨降り出す。一時十三分仙台驛發、電車にて約三十分にして多賀城驛着。物すごい様な秋雨を衝いて野道を行く。市川を渡れば前面に見ゆる丘が多賀城址なり。直ちに城址に至る。城址は南を正面にし、一部平地を含むも主として東から西に斗出せる市川部落の丘陵の全般に跨る。泥濘の坂道を行くこと少時、右側に一個の伏石あり。弘安十年乙亥八月日、勸進西阿彌陀佛の銘あり。やがて小廣い開闢地に至る。内城址なり。土壘に圍まれ二十箇程の礎石を残せり。秋雨蕭條たる古跡に立ちてそのかみの事を偲べば感慨深きものあり。下つて多賀城碑を見る。覆堂の中にあり。碑文は上部は箱形、下部は藥硯形なり。もと同様たりしが磨滅せしため手を加へしものならん。この碑は惠美押勝の建てしものと傳へらるれど眞偽に就いて鬼角の説あり。雨に禍され充分見るを得なかつたのでせめて繪葉書をと求めて、元來た道をすぶ濡れながら電車の驛へ。次いで鹽釜に行く。

驛前で傘を買ひやつと安心。街を通つて數丁、礎石の裏道を上りつめて鹽釜神社參拜。御祭神は健甕槌神、經津主神と別宮の鹽土老翁と志波津彦神なり。社前には藤原秀衡の三男和泉忠衡の寄進と傳へらる文治の神燈と、林子平の獻せし日時計あり。社務所への途中秋雨に煙る松島灣を俯瞰する。古文書見學。時間が少い爲め上ることも出来ず、縁側へ持ち出して立ち見なす。文治二年四月二十八日の公開所下文(裏面に宮内大輔源朝臣の裏判あり)。正文六年二月十八日の左京權大夫の下知狀、觀應二年十二月二十三日右京太夫吉良貞家下知狀(尊氏の袖判、吉良吉家の花押あり)。伊達家龜千代神領黒印狀等あり。四時二分電車に乗る。四時半仙臺歸着。本日の豫定は鹽釜から松島へ行き瑞巖寺、五大堂見學の筈なりしが降雨の爲め變更して、再び仙臺へ歸り、折柄の汽車にて仙臺を發ち、雨の宮城野を一路一ノ關へ。七時二十三分、一ノ關着。石橋ホテルに泥靴を脱ぐ。濡れたコートを脱いで丹前を引つけし時はほつとせり。

(足立)

第七日(十月二十日) 毛越寺。中尊寺。

午前七時石橋ホテル出發。小雨を降る奥州路を自動車にて毛越寺南大門前に乗り付ける。雨未だ上らず。嘉祥三年慈覺大師の開創、その後兵亂のために長治二年清衡基衡の再建となり、嘉祿二年の山火事で再び災を被り、今は礎石を残すのみである。門より十數歩にして池あり。大泉池といふ。その昔藤原三代が龍頭鶴首の畫舫を浮べて遊樂に耽りし姿、水面に落つる雨足に

偲ばれてそゞる感慨深きものあり。池のかなたには左より鼓樓、金色堂、鐘樓趾が見える。後背には昔のまゝの松の古樹が土壇趾に繁つてゐる。今偲ぶ姿は藤原氏三代が移殖せる京師平安朝の文化のあとそのものにして、いさゝかも開拓布教の慈覺大師の偉業の跡は偲げれない。廢殿造の花やかな藤原氏の榮華のみが眼前に髣髴する。夏草やつはものどもの夢のあとの碑を後に吾々は先を急ぐ。同じ車で中尊寺に走る。

中尊寺。嘉祥三年圓仁の開基にして、貞觀元年中尊寺の名號定まり、長治元年藤原清衡に勅して經營せしめられ、天仁二年に落成したと云はれてゐる。そば降る雨の中を杉の並木を左右にして登る。洛北の鞍馬街道を思はせる。途中右に展望所らしき所あり。しばし足を留む。藤原清衡が京都文化に深き憧憬を持ち、ひたすらにその移殖に努めんとせし面影今に歴然として、雨のはるかかなたに衣川は賀茂川の如く、東稻山は東山の如く今も昔のまゝに靜かに又思ひ出深くほの見えてゐる。左に茶屋右に新築の本坊を後に金色堂にたどり着く。建武四年の野火で諸堂宇の大半は烏有に歸して今は唯經藏、金色堂を残すのみで他の諸小堂は皆新しいものである。金色堂は清衡及び女壇三氏が清衡の遺骸を收めんがために造つた葬堂にして、正應元年の套堂で覆はれてゐる。内部の扉を開けて頂く間に、縁に上つて斗拱、軒廻りへ目をやつて見る。殊に墓股の張り強く構へた格好に強く魅せられる。内部に入る。堂は中央一間を内陣とし、他の二間を外陣とする。現世に極樂寶殿を現出せんと企てた

趾、今は彩色、裝飾すれあせて、往時の殉殉の状も唯その一片を覗ひ得べきのみで、吾々の豫想にいき、かのくるひを生じ、物足りなさを觀亦少しとしない。全體的に見て藝術的洗練さを欠き、むしろ精巧な工藝的綜合作品たる點にその特長を見る。

然しながら十二體の大日如來を時繪描き、金銅板の光背を附し、他の帶には寶相華を螺鈿にて埋めたる七寶莊嚴卷柱といひ、孔雀、花鳥を打出したる須彌壇の格狭間といひ、又所謂三藝殿の一といはれる藝殿等實に吾々をして眼を見張らしむるに充分である。次にすぐ北に位する經藏をとふ。元二階たりしが建武四年の災に上層を燒失し其の殘りに修理を加へたものであるといふ。内部外陣の長押等の僅かの部分に彩色裝飾のあとを偲び得るのみで、建築として見るべきものなし。唯藤原三代の寄附せる一切經の經卷八架にわたつて外陣を充たしてゐる様は又壯觀である。金銀交互經の佛說鸚鵡經、宋版阿育王傳卷第四等見ゆ。次に寶庫のものを拜觀に及ぶ。一字金輪佛、正和二年二月七日別當清原權大僧部判物、天治三年三月廿四日鎮守府將軍藤原朝臣清衡自筆の御經藏領骨寺村地圖等々。一字金輪佛は秘佛にして、木像なれども、全體から受ける感じは繪畫的で醜陋寺の大日如來の繪像を思はしめる。又この時代即ち藤原時代末像に於て玉眼の嵌入を見る。亦珍とすべし。天蓋に天人の風姿を刻す。これにて不充分ながらも中尊寺の見學を終り、道を返し急ぎ松島に向ふ。正午頃松島驛に着く。松島川に沿うて一しきリドライブ、海岸に着く。雨脚いよ／＼繁し。雨に打たれた松

島の消えんとする姿にせめてもの北齋の浮世繪を思ひ浮べ、更に心の未練さには強ひて妥協の鞭をあて、惜しみは止みなくも再び車中の人とならざるを得なかつた。仙臺二時着。湯本着七時。最終の一夜である。中村先生を始め諸先輩と共に歡を盡す。自己紹介等もあり、昔話は次から次へと止むべくもなく、思へばこの一日は吾々は時間にな任する奴隸の姿であつたらう。(野口記)

第八日(十月二十一日) 水戸。

午前九時十三分湯本發。同十一時一分水戸着。この日の見學を簡條書にして見る。

一。途中勝田驛に於て延喜式内社酒列藥師菩薩のあるを車窓より眺める。

一。水戸着後晝食前の時間を利用して弘道館に行く。

1 正面玄關前の櫻樹は紫宸殿のものを移し植ゑしものなりと云ふ。

2 額、『遊於藝』

3 館庭八卦堂に弘道館記の碑あり、

天保九年歲次戊辰三月齊昭撰文并書及篆額。

食後常磐神社及び彰考館に行く。

一。常磐神社には大砲鎗解爐火藥靈等の奉納されたるものあり、大砲は砲身に銘あるものにして烈公の命を以て製造せるもの大極と名づけられ天保年間のものなり。

一。彰考館。そこにて拜見したものは、

1 大日本史初稿本

元祿十年代のものにして佐々介三郎の手記なり、朱は格兵衛の加へしもの、

奥書に「元祿十年十一月廿六日校閲畢 中村新八酒泉 彦左衛門」とあり。

2 大日本史紀傳終稿

列傳八十四は東湖二十五歳の時の附箋なり、

奥書に「天保元年庚寅四月藤田彪校」とあり。

3 大日本史刑法志稿

藤田一正自筆のものにして栗田寛先生により先成さる。裏紙に東湖の朱書あり曰く「文政己丑春日孤十彪泣血謹識」とあり。

4 日本紀神代卷

奥書に曰く

「日本紀神代上下二卷 渡子鎌倉鶴岡供僧莊嚴院書藏上 延寶八年庚申十月 小石忠一」

「貞享五年戊辰五月修靈損加縹軸了

神書掌司 丸山可澄」

「明和四年丁亥閏九月修靈損加表帑

神書掌司 青山辨」

5 養舍宿題 全

學生の答案を集めしもの。

6 金澤本周易正義

稱名寺本にして金澤文庫の印あり。

7 獨乙兵書 十二冊

毛筆を以て獨乙の鬚文字をこくめに寫せしもの、寛政十二年のものなり。

その他尙古關雜錄や元祿時代の貸銀帳の裏に書いた大日本史、或は常陸國誌等々を見る。こゝでは故三浦先生と同學であつたといふ館長雨谷氏の非常なる御厚遇を受け、終に同氏から種梅記の朗讀をきいた。吾等一同謹聽。再び水戸驛に返らんとするや猛烈な雨に出喰はす。午後四時二十二分水戸驛發、七時二分上野着。これより自由行動、各々志す所に向ひ昭和八年度旅行全く終る。

かくして八日間にわたる見學旅行を無事終了し得たことは諸先先の御指導によるは勿論、殊に各地の先輩有志の方々の御盡力の賜ものであることを深く感謝して筆を擱く次第である。

會報

●評議員改選

昭和八年度本會大會(十一月十八日)に當り會則により評議員の改選投票を行ひ、その結果石橋五郎、羽田亨、原隨岡、濱田耕作、西田直二郎、時野谷常三郎、那波利貞、中村直勝、矢野

仁一、小牧實繁の十氏が當選した。

會員移動

入 會

仙台市

野町

東京市中 區沼袋北一丁目一五七

(以上内田吟風氏紹介)

鳥取縣立第一中學校内

(井上智勇氏紹介)

大阪府立生野中學校内

(吉田三郎氏紹介)

京都市姉小路神泉町

(沖野安良氏紹介)

退 會

京都市東山區馬町

轉 居

台北市古亭町二一一

京都市上京區出雲路内河原町三七

福岡市須崎裏町五七七

宇治山田市外神宮皇學館内

栃木縣真岡中學校内

寄贈交換圖書雜誌目錄

史學雜誌

四四ノ九、一〇、一一

東京帝國大學内史學會

經濟論叢 三七ノ四、五、六

京師帝國大學經濟學會

青丘學叢 一三

青丘學會

史迹と美術 三五、三六、三七

史迹美術同友會

哲學研究 一八ノ一〇、一一

京都哲學會

國學院雜誌 三九ノ一〇、一一、一二

國學院大學

考古學雜誌 二三ノ九、一〇、一一

考古學會

商業と經濟 一四ノ一

長崎高商研究會

民俗學 五ノ九、一〇

民俗學會

皇學 一ノ四

神宮皇學館々友會

歷史地理 六二ノ三、四、五、六

日本歷史地理學會

日本歷史 第一回

岩波書店

信濃 二ノ九、一〇、一一

信濃郷土研究會

日本古代經濟 交換篇第四册貨幣西村眞次著

東京 會 堂

社會經濟史學 三ノ七

社會經濟史學會

社會學徒 七ノ九、一〇、一一、一二

社會學徒社

人類學雜誌 四八ノ九、一〇、一一

東京人類學會

國史學 一六

國學院大學國史學會

西洋中世史史料及考證 三東京商大西洋中世史史料及考證の會

龍谷大學史學會

龍谷史壇 一二

佛敎美術社

佛敎美術 一九

佛敎美術社

史淵 八

九大史學會

東亞經濟研究 一七ノ四

山口高商東亞經濟研究會

聖德太子御製法華經義疏の研究(花山信勝著)

東洋文庫

史潮 三ノ三

大塚史學會

宗學研究 七

大谷派本願寺宗學院宗學研究會

南方土俗 二ノ三

台北帝大南方土俗學會

世外井上公傳 第一卷

井上鑿傳記編纂會

會 報

第十九卷 第一號

二二一